資料２

啓明地区・東光地区・豊岡地区三団体及び道北勤労者医療協会との連携に係る協議／A地域

［経　過］

道北勤労者医療協会から、「地域貢献活動として、災害時の対応や、高齢者の課題など地域と連携し取組みたい。」との相談があり、一条通病院の周辺に位置する啓明地区・東光地区・豊岡地区と連携し、平時と災害時に地域と医療機関ができる対策と連携方法について協議を進めている。

［メンバー］

・道北勤労者医療協会　・地区市民委員会　・地区民生委員児童委員協議会
・地区社会福祉協議会　・地域包括支援センター
・旭川市（防災課、福祉保険課）　・旭川市社会福祉協議会

［目　的］

・災害時の地域住民の支援と連携方法についての協議
・災害に備え、平時から取り組めることの協議

［内　容］

・災害時個別避難計画の作成について　・災害時支援研修会の開催について
・避難行動要支援者名簿対象者の実態把握とその方法について

実　績

（事業・活動の実績）

○良かった点

①地域と医療機関が一体となって協議を進めていることから、双方の強みを生かした取組みとしたことが、連携のしやすさにつながっていると考える。

・地縁組織：地域特性や地域住民の実態を把握している。地域住民へマンツーマンの対応も可能である。

・医療機関：支援対象者の選別時等に医療的な知見からアドバイスが可能。バスを使った支援や在宅酸素の方の受け入れ等、大規模な支援を行える。

②地域全体で平時からの準備や災害への意識が広がりつつある。

○難しかった点・今後の課題

・支援対象者数や身体状況の変化が常に生じるため、地縁組織が実態把握を続けるのは難しい。ケアマネジャーなど、他の専門機関と連携する手段を考える必要がある。

・支援対象者の情報などを共有・更新の仕組みづくりが必要である。

総　括

研修会の開催や支援対象者の実態把握を通して、医療機関と地域の連携の方法が見えつつある一方で、事前に把握している基本情報と実際の情報の差異や、支援にあたる担い手の不足など、協議・活動したからこその課題も見えてきている。医療機関、地縁組織、行政など多機関が介入している強みを生かした、円滑な連携方法やシステムの構築を目指していく必要がある。

【共助の居場所づくりに向けた取組】/B地域

（西地区多世代交流この指と～まれ）

【目　的】

西地区在住の子どもから高齢者まで、安心して住み続けられる地域をつくることを目的に「顔の見える地域づくり」として、昔遊びを通した多世代交流を実施している。

【経　過】

西地区の地域住民（子どもから高齢者）を対象として行っていた「めんこ・お手玉・紙相撲・あやとり」などの昔遊び（幅広い層が共通に楽しめる内容）をとおした多世代交流を令和５年度からは「地域交流」と「居場所づくり」に向け、まち協の負担金を活用して実施している。

【開催日】

令和６年８月３１日（土）

【内　容】

西地区にある新町小学校を会場に、地域内に在住している幅広い年代層が「カーリンコン」と「昔遊び」を通して交流会を開催した。

※参加者：３０人、地域ボランティア・実行委員：１１人

行政・包括・社協職員：７人　<u>計４８人</u>

実　績

（事業・活動の実績）

○良かった点
・コロナ禍により地域の小学校で開催できなくなっていた多世代交流であったが、今回久しぶりに新町小学校を会場に開催することができた。
・「地域まちづくり推進事業」の負担金を活用し、地域住民が主体となって、西地区を住みやすい地域にするための検討から生まれた活動である。
・前回、前年度2月に開催し盛り上がったカーリンコンを通じて、子どもから高齢者までの参加者が一緒に楽しむことができた。
・毎回、地域の保育園の園児も参加し、交流の場となっていて、地域住民の楽しみとなっている。
・検討をくり返し行うなかで、開催の目的や趣旨を丁寧に確認しながら進められたことで、地域住民による主体的な活動につながっている。

○難しかった点
・買い物の準備等一部の方に負担がかかってしまい、役割分担に難しさを感じた。
・回覧が行き届かない町内会があり、周知に検討が必要と感じている。
・子どもたちの参加を増やす方法が課題となっている。

総　括

・大きな事故やトラブル等もなく、地域住民が主体となって「多世代交流」を実施することができた。
今後は、開催側の負担（無理のない範囲で）を軽減しながら、各小学校区を単位として幅広い世代とのつながりづくり進めていきたい。

【　ゴミ屋敷の問題を抱える世帯への支援　】／C地域

［ケースの概要］
- 40代女性、独居（市内に母在住）
- 1年前に夫と死別後、生活保護受給中
- 糖尿病とパニック障害にて通院中

［支援経過］
- 保護課CWより片付け支援の依頼あり、本人同意を得る
- 障がいの相談支援事業所と同行訪問を重ねながら、片付けの準備と実態把握（生育歴・生活歴等）、役割分担を行う
- クリーンセンターに協力を依頼
- 水道管破損と家の中の状況について管理会社に相談するとともに、衛生状態が悪いため、転居を検討
- かかりつけ医に家の状況を報告し、連携を図る

【片付け前の台所】

【片付け前の居間】

［支援の結果］
- 管理会社が変更となり、リフォーム後同じ部屋に住むことができることとなる
- ２度にわたる片付けを実施（トラック５台分）
- 片付け後、週１回のヘルパー訪問により、片付いた状態を維持
- 民生委員が月１回程度自宅を訪問

【片付け時の様子】

実　績

（支援の実績）

○良かった点

- 複数の関係機関が役割分担をすることで、効率的に支援を進めることができた
- 孤立していた本人が、片付けにより事業所や民生委員とつながることができた
- 本人から「得意な手芸をやりたい」「みんなにきれいにしてもらった家なので、助けてもらいながら維持したい」など、前向きな話を聞くことができた
- 様々な関係機関が協力し、自分たちの仕事の枠をちょっとはみ出して支援を行った結果、本人が新たな一歩を踏み出すことができた

【リフォーム後の自宅】

○難しかった点

- 「ごみの片付け」という誰の仕事でもない作業を協力して実施する必要性について、関わる関係機関に理解を得ること
- 本人の能力を見極めながら、残すものと捨てるものを分別すること

総　括

（今後の取組に向けた展望など）

- いわゆる「ゴミ屋敷」になる前に、早い段階で発見し、解決に向けて動き出せるような体制の構築
- 片付ける際に、関係機関がスムーズに協力できる体制の構築

“あったらいいなぁ”を形にするプロジェクト／D地域

［概要・経過］

ボランティア活動に関心のある地域住民の方と、認知症や障がい者支援に関わる福祉専門職の方が集まり、お互いの活動や取組みに関する情報交換を行いながら、地域に“あったらいいなぁ”と思う社会資源について、ボランティア懇談会という場で話し合いを続けてきた。

このボランティア懇談会での話し合いから、認知症や障がいを抱える当事者の方が、主体的に社会参加できる取組みとして、オレンジカフェや手作りの思い出作品展が生まれた。

令和６年度から、高齢者、障がい者、子ども、現役世代を含めた幅広い世代が、ボランティア活動を通じてつながりを深めることを目的に、包括的支援体制整備事業の第２層協議体として位置づけ、参加者同士の関係づくりや社会資源開発を目指している。

［プロジェクトメンバー］

・ボランティア活動に関心のある地域住民
・神居圏域福祉事業所
・神居・江丹別地域包括支援センター
・地域まるごと支援員

［実現した取組］

・オレンジカフェ（北彩都ガーデンにて開催：当事者の方と住民ボランティアがペアになり、そのペアを福祉専門職がフォローしながらカフェでの接客等を行い、地域住民との交流を図った）
・手作りの思い出作品展（旭川市ときわ市民ホールにて開催：当事者の方が制作した絵画や手芸等を展示した）

実　績

（事業・活動の実績）

○良かった点

・当事者とボランティア活動者の活躍の場になっている。
・外部で展示する機会があるということが、作品作りのモチベーションにつながった。
・ボランティア活動者間でも支え合う関係性の広がりができた。
・認知症当事者だけでなく、障がいを抱えた方の参加も増え、活動に広がりがみられている。

○課題（難しいと感じる点）

・ボランティア活動者の参加人数が少なく、また新しい参加者が増えていない。
・幅広い地域住民や福祉専門職、学校関係者等の参画が得られていない。

総　括

住み慣れた地域で暮らし続けられるよう、高齢者、障がい者、子ども、現役世代を含め、ボランティア活動者、各支援に携わる専門職、学校関係者等が共に地域の活性化、繋がり、助け合い等について検討、連携しながら具現化に向けた地域づくりを目指し、協議、活動を続けていく。